令和4年度
内灘町子ども読書感想文
コンクール作品集

発行　内灘町学びの風推進協議会
内灘町教育委員会

令和四年度　内灘町子ども読書感想文コンクール　作品集

《目　次》

【小学生の部】

みんなわんだー　清湖小学校一年　大川　あん夏　1

いただきますってなぁに　大根布小学校一年　松井　隆真　2

さっちゃんのまほうのて　清湖小学校二年　高島　照　4

こまっている人いませんか？　大根布小学校二年　松井　梨花　5

「はるかのひまわり」を読んで　向粟崎小学校三年　津久井　美和　7

8月6日のこと　清湖小学校三年　塗師　暖陽　9

「木のすきなケイトさん」を読んで　清湖小学校四年　中山　敬太　10

決してくり返してはいけない　白帆台小学校四年　夷藤　ひまり　12

捨て犬・未来と子犬のマーチこの子を引き取ってくれますか？　向粟崎小学校五年　油野　琴美　14

わたしにとっての「時間」　鶴ケ丘小学校五年　安嶋　凜　16

パンづくりから見える環境問題　向粟崎小学校六年　尾ヶ口　紗弥　18

福也の物語　清湖小学校六年　喜多　隼大　20

【中学生の部】

「人生」　内灘中学校二年　堀井　香那　22

本当の家族　内灘中学校二年　井下　瑚々　26

毎日、毎分、毎秒　内灘中学校三年　奥村　凜　29

「一所懸命に生きる」　内灘中学校三年　武部　日菜子　32

令和四年度　内灘町子ども読書感想文コンクール　入賞作品一覧　35

編集後記　40

みんなわんだー

清湖小学校　一年　おおかわ　あんな

わたしは、としょかんでこのほんをみつけたときに、びっくりしました。なぜかというと、ひょうしのえのにんげんのめが、ひとつしかなかったからです。どうしてめがひとつしかないのかな？とすこしかんじました。そのわけをしりたくて、このほんをえらびました。

めがひとつしかないおとこのこは、じぶんでふつうのことじゃないといっていました。わたしもそうおもいました。でも、ふつうのことはできるのに、ほかのことみためがちがうだけでふつうじゃないというのは、すこしおかしいとおもいました。

そのこのおかあさんは、そのこをわんだー（きせきのこ）といいました。おかあさんと、いぬのでいじーにとっては、わんだーなんだな。きっとわたしのおかあさんも、わたしのことをわんだーとおもってくれているとおもいました。

どうしてほかのひとは、じろじろみたり、ゆびさしてわらったりするのかな？わるぐちをいうひとがいるのかな？わたしが、さいしょにこわいとおもったことも、おかしいのかもしれないと、おもうようになりました。わるぐちは、そのこにしっかりときこえているので、とてもかわいそうにおもいました。わたしもおともだちにいやなことをいわれると、かなしいきもちになります。そんなときにわたしも、わんだーみたいにへるめっとをかぶって、きこえないようにすれば、かなしくなくなるのかな？でも、そのまえにみんなが、やさしいきもちになっていやなことを、いわなけれ

ばいいとおもいます。

わたしはこのほんをよんで、ちきゅうには、はだのいろも、かみのいろも、あるきかたも、はなしかたもみんなちがうのだから、いろんなひとがいてあたりまえだとときづきました。めがふたつがふつうだとおもったけど、ひとつでもわたしとおなじわんだーです。みんななかようくしようとおもいました。

いただきますってなあに

大根布小学校　一年　まつい　りゅうしん

「ぼくがいる」ほんのひょうしのしゃしんに、ぼくにそっくりのおとこのこがいておもしろそうだなとおもってこのほんをえらびました。

よんでみると、さかなのひょうじょうがおもしろかったです。ぼくはいままで、こんなにちかくでさかなをみたことはなかったし、さかなをさばくところもみたことがなかったからです。だけど、さかなをさばいているところはこわいなとおもいました。

なつにおじいちゃんのいえにいったとき、はじめてかわでさかなつりをしました。やまからとってきたたけにいとをつけて、はたけにいたみみず

をつけてつろうとしたけれど、さかながすばやすぎてすぐにえさをたべられてしまい、つれませんでした。だから、おなじみみずでこんなにおおきなさかながつれるのはすごいなと思いました。

ぼくはまぐろがすきです。まぐろいがいのさかなはおいしいかおいしくないかわからないからいつもたべませんでした。おにくもすきです。いままでは、なにのどうぶつをころしたのか、だれにいただきますをすればいいのかもわかりませんでした。だけどほんをよんだあと、おかあさんからぶたやうし、とりのおにくをたべていたことをきいてすこしこわいなとおもいました。

これからは、おなかがいっぱいになってたべられなくならないように、おかしは3じしかたべないようにします。たべられないさかなは、つらないようにします。おみせでは、たべられるだけちゅうもんするようにします。おうちでは、おかあさんがてーぶるにだすまえに、だされないように「ぼく、これいらないよ」というようにします。いきものをころすのはいけないことだけど、たべないとぼくはいきられません。だから、こんどからはふざけないでさいごまでたべたいと思います。食べられるいきものにいただきますをするのもわすれません。

さっちゃんのまほうので

清湖小学校　二年　たかしま　ひなた

この本をえらんだのは、どんなまほうがつかえるのかわくわくしたり、まほうの手なのに、なぜないているのかふしぎだったからです。

このお話は、さっちゃんという女の子がようちえんのおままごとでおかあさんやくになりたかったのにお友だちに「手のないおかあさんなんてへんだもん。」と言われけんかになって大なきしたけどおとうさん、おかあさん、先生、お友だちとのかかわりで元気をとりもどしていくというものです。

この本を読んで気になったところが二つあります。一つ目は、友だちの「手のないおかあさんはへんだもん」ということばです。てがないということばは、なかまはずれにされていじめられているようにしか聞こえません。もしぼくがそのことばを言われたらすごくかなしくなります。きっとさっちゃんもいやな気もちになったと思います。おかあさんやくは、手がなくてもみんながたすけあえばできるはずです。だからぼくはそんなことを言わずたすけあいたいです。

二つ目は、おとうさんとさっちゃんが手をつないでいるところです。それは、さっちゃんの手には、人をうれしくさせるふしぎな力があると思うからです。ぼくはいやなことがあったときやつかれたときにはおとうさんやおかあさんの手をにぎります。そうすると、元気が出てうれしくなったり、がんばろうという気もちになったことがありました。もしかしたらぼくのおとうさんやおかあさんもまほうの手をもっているのかもしれません。

この本を読んでみて、まほうの手というものは、あいてを元気にすることができる手なのではないかと考えました。ぼくもこれからたくさんの人とかかわりあいながらふれあいを大切にしていきたいです。そして、こまっている人がいたらぼくのまほうの手でたすけてあげていきたいです。

こまっている人いませんか？

大根布小学校　二年　まつい　りん花

わたしは「どうぞのいす」という本をよみました。姉がほいくえんのときにこの本のげきをしていたのを見てこれをえらびました。

どんなお話かしょうかいします。うさぎさんがつくったイスにろばさんがどんぐりをおいておひるねをします。そのあいだにいろんなどうぶつがやってきて、もらったもののかわりにじぶんがもっているものとこうかんします。ろばさんが目がさめたときにはどんぐりがくりにかわっているというお話です。ねているあいだにおこったことがわからないろばさんは「どんぐりってくりのあか

ちゃんだったけ？」とかんちがいするところがおもしろかったです。

わたしはこのものがたりから学んだことが２つあります。一つは、つぎの人のことを考えてこうどうするたいせつさです。もしも、ろばさんのつぎにきたくまさんがどんぐりをひとりじめしていたら、どんぐりがくりになることはありませんでした。なにかをもらうかわりにじぶんができることをすると、人のためになるということを学びました。

２つ目は、人のためになることをするということは、いつかじぶんにもかえってくるということです。ことしの夏休みは、かぞくぜいいんがコロナになり、２しゅうかんそとにでることができなくなりました。買いものにもいけなくて、あそびにいくこともできなかったけど、おともだちのおかあさんがとんじるをとどけてくれたり、しんせきがおかしやジュース、アイスをとどけてくれました。ふだんから、人のためになることをしていると、こまっているときにいろんな人がたすけてくれるのだと思います。

わたしは、これからはおかしをひとりじめせずきょうだいでわけたいと思います。そしてこまっているひとをみつけたときはたすけたいと思いました。とてもおもしろい本でした。

「はるかのひまわり」を読んで

向粟崎小学校　三年　つくい　みわ

もし、自分の家の近くにはんしん・あわじ大しんさいのような大きなじしんがあったら、とってもつらい事だと思います。でも、いつかさんやこうべの人たちは、はんしん・あわじ大しんさいがあったけど、「はるかのひまわり」を通して、しんさいからのふっこうができるようにがんばろう！という気持ちがすてきだなと思いました。

じしんがおきて、いつかさんは、なにもかもグシャグシャの所で、ひとりぼっちになって、こわかっただろうなと思いました。いつかさんは助けられたけど、妹のはるかさんは小学６年生でなくなってしまって、かわいそうだなと思いました。もし自分の家族がなくなってしまったら、とても悲しいです。じしんがおきたその日から、学校の体いく館ですごして、すごくたいへんだったと思います。

高校じゅけんの日に、大学生ボランティアのお姉さんが、おべんとうを作ってきてくれて、お姉さんも家をなくしたけど、人のことを思いやっていてすてきだなと思いました。

じしんから一年たった夏の日に、家のあとに大きなひまわりがさきました。うどんやのおっちゃんが「はるかのうまれかわりや！」と言いました。その秋、おっちゃんは、ひまわりのタネをしゅうかくし、そしてつぎの年の春から、タネをまきはじめたのです。でも、いつかさんは、「もういやや。じしんもはるかのおもいでも、ひまわりも、いや。なんもかもはこにつめて、海のそこへしずめてしまいたい！」と言ったから、はるかさんが

なくなった事がとてもつらかったんだと思います。
　じしんから六年目に開かれたイベントに、じしんで家をなくしたり、家族をなくした人が何人も集まっていました。いつかさんは、きっと同じ考えや思いがある人がいるから、じしんの事も話していいと思ったんだと思います。そして、こうべや自分たちがしょんぼりしていたら、なくなった人も悲しむから元気になったんだと思います。
　自分も、しんど2くらいの小さなじしんなら、けいけんした事があります。その時、きんきゅうじしんそくほうが鳴って、本当にじしんがおきたのか？とうたがいましたが、本当にじしんがあって、こわかったです。自分ははんしん・あわじ大しんさいのような大きなひがいがあった事はけいけんしていないので、この本を読んで、どれだけの大きなひがいがあるのかが分かりました。じしんがおきると、家がこわれたり、道路にヒビが入ったり、人がけがをしたり、なくなったりする事が分かって、じしんは、人々にえいきょうをおよぼすものだと思いました。
　この本を読んで分かった事は、いのちの大切さや、まわりの人のやさしさが大切だという事です。だから、自分は家族を大切にしたいです。そして、家族といっしょにたくさん思い出を作りたいです。これから、自分はいつでもみんなにやさしくしていきたいです。

８月６日のこと

清湖小学校　三年　ぬし　ひなた

この本をえらんだりゆうは、たまたま図書館に行った日が８月６日でこの本を見つけた時８月６日ってなんだろうと思い本を見てみるとせんそうのおはなしで、読みたいと思いこの本をえらびました。

この本は、しゅじんこうのお母さんが、16さいの時にひろしまけんのげんばくをたいけんした本当にあったおはなしを書いた本です。日本語とえいごで書いてあり日本人だけではなくほかの国の人たちもよめる本になっています。ぼくがいんしょうがのこったところが２つありました。まず一つ目は、せとないかいのしまうまれの主人公のお母さんはひろしまにげんばくが落とされているのに何も知らずにお兄さんの所にさし入れを持っていった場面です。なぜならいつも通りの町だと思っていたのに町がかわりはてていたらぼくだったらびっくりすると思うからです。二つ目お母さんはどんなきもちだったでしょう。だいすきだったお兄さんはいっしゅんでいなくなってしまったのです。かえりのきしゃのなかわたせなかったたべものをかかえてお母さんはどんなきもちだったでしょうという場面です。なぜならかわいそうなきもちになったからです。だいすきなお兄さんがいっしゅんでいなくなってしまってもし自分だったらかなしいしあいたくてたまらないと思います。主人公のお母さんもぼくと同じきもちだったのではないかと思います。

ひろしまにげんばくドームがあることをしってしらべたことがあります。すごくいりょくがある

ばくだんなのにたてものがのこっていてすごいことだと思いました。いつか見に行ってみたいなと思います。ぼくのお母さんは見たことがあるらしくせんそうのこわさを知ったと言っていました。せんそうのない今がどんなにしあわせなことかと思ったそうです。今、ロシアとウクライナがせんそうをしていることをニュースで目にします。多くのたてものや家をこわされたりかんけいのない人たちがいのちをおとしたりないている人たちをみるとはやくせんそうがおわってほしいと思います。

せんそうはこわいものだと思います。いつじぶんがいのちをおとすかもしれないというきょうふやふつうのあたりまえの生活ができなくなるからです。みんなやさしいきもちをもってなかよくへいわな世界になることをぼくはねがっています。

「木のすきなケイトさん」を読んで

清湖小学校　四年　中山　敬太

ぼくは、「木のすきなケイトさん」という題名を読んで、木を好きな人はいるんだなと思いました。ぼくは、木が好きだと思ったことが一回もないからです。ケイトさんは、どうして木が好きなんだろうと思って気になったのがこの本を選んだ理由です。

ぼくは、この本を読んでケイトさんが木が好きというのをずっとつらぬいていてすごいと思いました。ケイトさんの時代は、女の子は手がよごれることをしてはいけないとしつけられていたし女の子には科学の勉強はひつようないといわれてい

たがあきらめず、どろんこになりながら科学の勉強をしてその時代の女の人では、めずらしい科学者になりました。それだけでもすごいのに、ぜったいに木ははえないといわれていたさばくの町に木をはやしました。

ぼくだったらケイトさんのようにしつけられていたことにていこうして好きなことをつらぬくことはできないかもしれません。なぜかというと、ぼくだったら反対されてもつらぬこうと思う好きなものがないからです。それに長い間好きという気持ちをもちつづけるということは、むずかしいと思ったからです。

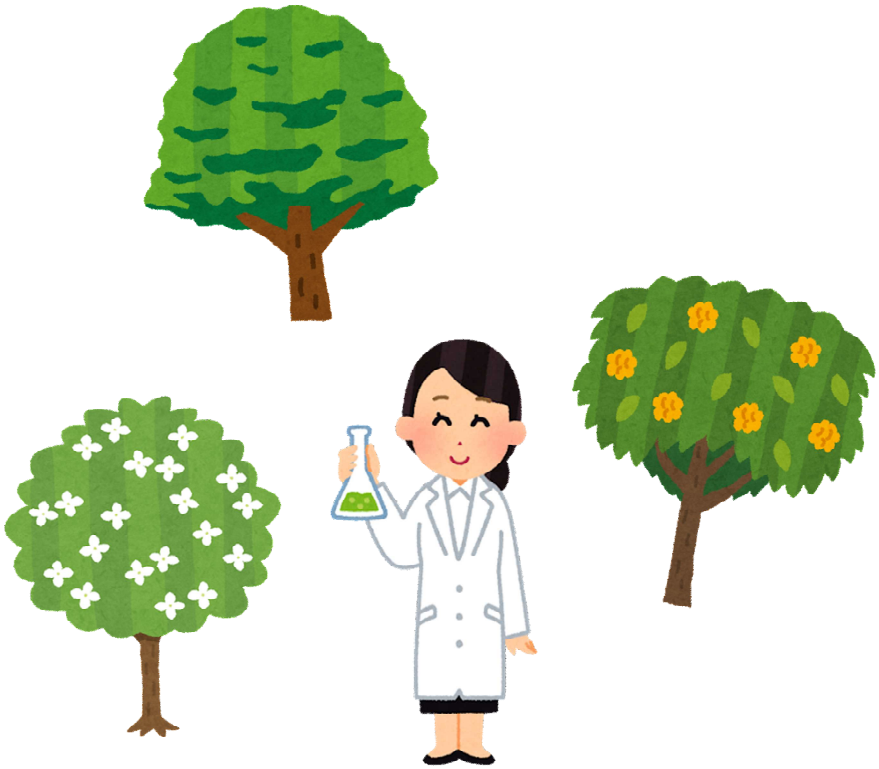
ケイトさんが木をいっぱい植えたことで木がほとんどなかったさばくの町がしぜんゆたかになりました。小さいころから好きということをつらぬいていくと町もかえることができるんだなと思いました。

なにより、学校の先生をやめてまで町の公園に木を植えようとしたことは、とても勇気が必要だったと思います。それに、ただ木を植えるだけでは、育たなかったはずです。ケイトさんが小さいころから勉強してきた知しきと、町の人たちや世界中の園げい家の協力があったから木をはやすことができました。

ぼくが最初に思った「ケイトさんはどうして木が好きなんだろう」というぎもんの答えは、ほんの中には書かれていませんでした。でも、森の中で育ったケイトさんは、木や植物が人間にあたえてくれる良いことを知っていたから木が好きなんだ、とぼくは考えました。

ぼくは、この本を読んで好きをつらぬきつづけることの大切さやたいへんさを知りました。好きという気持ちは、自分だけではなくかんきょうもかえる力になるということも知りました。

ぼくには、今ケイトさんのようにこれについて勉強したいという好きがありません。これから、いろんなことにきょうみをもってぼくの好きを見つけたいです。いつか、ぼくの好きという気持ちが人の役に立つようになったらうれしいです。



決してくり返してはいけない

白帆台小学校　四年　夷藤　ひまり

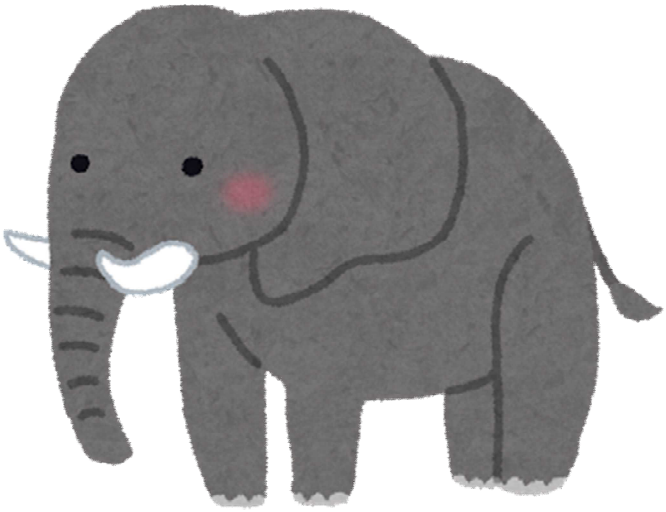
私は動物が大好きです。この「かわいそうなぞう」を選んだのも動物が表紙で、どうしてかわいそうになってしまったのかを知りたかったからです。

戦争中、上野動物園で三頭のゾウたちが殺されなければならなかったという話しでした。もしも、動物園にばくだんが落ちたら、動物たちがマチへあばれ出してしまうかもしれないから、皆殺されてしまったのです。

読んでまず思ったのは、「かわいそう」でした。どうして人間たちが行っている戦争に、関係のない動物たちまで、まきこまれて、命を落とされな

ければなかったのか、はじめて知りました。
ぞうがかわいそうでエサをあげてしまったぞうかかりの人の気持ちがよくわかりました。私もきっとあげてしまうと思います。自分の子供のようにかわいがっていたのに、急に殺さなければならないつらさが伝わってきました。
ぞうに注射の針がささらないところも印象にのこりました。馬用の注射でも、ぞうの皮が厚すぎてささらないのもあたり前です。ぞうかかりの人たちにとって、苦しむぞうの姿を何十日も見ることになって本当につらかっただろうなと思いました。
数日前、テレビで今年の長崎平和記念式典を見ました。戦争は絶対に繰り返してはいけないというひばく者たちの思いがとても伝わってきました。ばくだんが落とされた時、ひばく地には、ごろごろと死体がころがっていて、
「水を、水を。」
と、さけぶ声が聞こえていたそうです。水を求めなくなっていった人たちのために献水が行われている様子がうつされていました。今、あたり前にある水や、この日常があるということの大切さに気づかされました。
戦争を決してくり返してはいけない、そのために何をすればいいかを考えました。平和を願うなら、暴力ではなく話し合いをしてかいけつしていくことが一番大切だと思います。そして仲よくしていくことが大切だと思います。戦争は人間たちも自分も傷つくけど、動物たち生きもの全てにとってつらいことだと分かりました。戦争がもし、おこらなかったらぞうたちは殺されなくてよかった、たくさんの人たちが死ぬこともなかったと、考えたら悲しくなります。戦争はいったい何のためにするのだろうと思ってしまいました。

戦争のひどさを知って、決してくり返してはいけないと、声に出して戦争反対をうったえつづけることが、平和へとつながると思いました。それが私たち人間と動物、全ての生きものの、幸せになると思います。



捨て犬・未来と子犬のマーチ
この子を引き取ってくれますか？

向粟崎小学校　五年　油野　琴美

なぜ、こんなにカワイイ犬が目の前にいるのに捨てるなんてことができるんだろう。わけは、私は犬が大好きで大切にしようと思っているからです。私だったら、麻里子さんと同じでどんな事情でもどんな子でも、もらいに行くと思います。この前、テレビで多頭飼育崩壊にいた繁殖犬が引き取られて、ご飯をたくさん食べ、三日後に亡くなったという話を聞きました。私が繁殖犬だったらすごく幸せだったと思います。わけは、多頭飼育

崩壊の現場で亡くなるよりも、ご飯をたくさん食べ、フカフカの布団で息を引き取るほうがずっと幸せだからです。この話に登場するひなちゃんも殺処分が明後日で未来ちゃんの里親が引き取りました。里親はすごい一歩をふみだしたなと思いました。わけは、一匹飼っているのにもう一匹飼うなんてどれだけ大変か分かっているはずなのにひなちゃんを引き取ってきたのですごいなと思ったからです。私だったら、一匹でせいいっぱいだからもう一匹なんて本当は飼いたいけど、すごく大変なので飼っていないと思います。

私は今、犬を飼っています。もらい犬だったので、初めにビクビクふるえていましたが、私たちを信じ始めると安心してねむってくれたり今ではいつでもだっこをさせてくれるようになりました。

4年前、店の外でダンボールにチワワの子犬が入っていました。私は、とてもかわいそうだと思い、持ち帰ろうとしたらおじさんがよってきたので子犬は一人ぼっちじゃないと安心してその場をはなれました。本当は飼いたかったけど、まだ飼う自信がなかったし、子犬は他の人が持ち帰ってくれると思い、あきらめました。二年生になってから、やっと飼ってもらい、すごくうれしかったです。

一年前、犬の兄弟に会ってきました。私は、なんで動物の兄弟は、はなればなれになってしまうんだろうと思い、悲しくなりました。会っている犬を見ている私までうれしくなりました。ひなちゃんの赤ちゃんもペットショップに売られてお母さんのもとをはなれてバラバラになってしまいました。どうして、お金のために命を売るなんてこと

ができるんだろうと思い、怒りを覚えました。できるなら、私が赤ちゃんたちをお母さんのもとへかえしてあげたいです。そして、いつまでも家族でずっといっしょにいてほしいです。もう絶対にはなればなれになってほしくない。もし、それが自分の犬ならかわいそうだし、すごく悲しいです。だから、犬が家族になってから散歩をして仲を深めたり、犬のおかげで友達がふえたり、家で一人のときも犬のおかげでさびしくなくなります。そんな犬に毎日感謝しています。

だから、これからも犬・猫の死をへらしてたくさんの人に犬・猫と過ごす楽しさを飼う前とくらべてほしいです。この本を読んで、「命の大切」を読む前よりも考えるようになりました。この本に出会えてよかったです。

わたしにとっての「時間」

鶴ケ丘小学校　五年　安嶋　凜

わたしは本を読むことが好きです。この夏休みは「モモ」を読みました。なぜこの本を選んだかというと、お母さんが、子どものころ読んでおもしろかったという話を聞いたからです。「モモ」という分かりやすい題名も印象に残っていたので、手に取りました。長編小説でしたが、いつも通りいっきに読んでしまいました。

町はずれの円形劇場あとに、主人公のモモがまよいこみます。モモは年れいも素性もわからない不思議な女の子です。町の人はモモに話しをきい

てもらうと、幸福になるのでした。しかし、「灰色の男」が人間から時間をぬすんだため、モモがそれをとりかえすお話です。

わたしがこの物語の中で特に印象に残ったのは、モモが灰色の男のあとをつけるシーンと、灰色の男たちの会議室にしのびこむシーンです。モモが長いテーブルにもぐりこみ、四つんばいになって見つからないように進んでいったときは興ふんしました。いつも本をよんでいても、こういうドキドキ、ハラハラした場面が特に好きで、思わず声をあげてしまいます。

わたしがモモだったら、こんなきけんでとても勇気のいることはできないと思います。私は、自分はおとなしい性格だと思っています。だから、モモのように行動的な子は、自分にないものをもっていてあこがれます。物語を読みながらまるで自分がモモになったような気持ちになり、いつもの自分じゃできないことをできた気分で勇気がもてました。最後、灰色の男に勝ったモモは本当にすごいなぁと思いました。わたしも、モモのようにとっさの時に対応できる勇気をもちたいです。

わたしがこの本を読んで分かったことは、「時間」とは何か、ということです。わたしは今までそんなことは考えたことがありませんでした。「時間はただ無意識のうちに流れるもの」という考え方だったのです。しかし、本文には、「時間とは、生きるということ、そのものなのです。」と書いてありました。その意味を考えると、「なるほど！」と思えました。一秒、一秒、わたしは生きているのです。夏休み、好きな絵をかいて過

ごす時間も、気ののらない宿題の時間も、全部わたしが生きているあかしで、かけがえのない時間です。改めて、時間を大切に使おうと思いました。

今、コロナで人と接することがへっています。わたしは、一人で静かに過ごすことが好きですが、ずっとだれとも話さないと、やっぱりさみしいです。弟といっしょに夏休みを過ごしていると、弟が私の言ったことでよろこんだり、おこったりするので、わたしもいっしょにうれしくなったり、イライラしたり、色んな感情になります。二人で過ごす時間は、一人よりも短かく楽しく感じます。一人じゃないってことに感謝して、残りの夏休みの時間を、弟と大切に使いたいと思います。そしてコロナがおさまったら、みんなと時間が共有できる日常がもどってほしいです。

パンづくりから見える環境問題

向粟崎小学校　六年　尾ヶ口　紗弥

「捨てないパン屋の挑戦、しあわせのレシピ」という本を読もうと思ったきっかけは、最近ニュースなどで取り上げられている環境問題のことについてかかれていると知ったからです。だから、自分の身近な問題として考えやすいと思いました。

この本を紹介されたときに、パンを捨てるのかと疑問に思いましたが、多くのパン屋は捨てていると知り、とてもおどろきました。

捨てないパンを作ることで、環境にもやさしく体にも悪えいきょうのない最高なパンが作られました。日本人は一日におにぎり一個分をごみとして捨てています。物を捨てて、焼きゃくするとき

も電気などを使い、地球温暖化を加速させています。実際私も苦手な食べ物が多く苦手な食べ物は全て残しています。食べ物を残したところで地球環境が変わると思えず、もし変わったとしても水や電気などで地球環境の改善に取り組めば問題ないと考えていました。

しかし、話を読み進めると、田村さんがすごいと思いました。理由は三つあります。

一つ目は、フランスに修行に行ったからです。日本から遠くはなれているフランスに行くには、たくさんの時間と費用が必要です。また、その時店は赤字で、とても大変な時です。今来てくれているお客さんにも迷惑がかかります。すごい大きな決断をしたな、と思いました。

二つ目は、日本人の働く時間よりも少ない時間で仕事を終わらせているからです。日本は世界に比べて労働時間がとても長いです。それに田村さんは、食品ロスをださないように、色々な工夫をしていました。本来なら、時間がたくさんかかると思います。ですが、労働時間が短いことがすごいと思いました。

三つ目は、自分のためではなく、環境のために一度しかない人生をささげているからです。言うのは簡単でも環境に人生をささげることを実際に行動できるかと言われると、私は難しくてできないと思います。田村さんは、捨てないパン屋を開店する、という目標があります。絶対にあきらめずに挑戦し、自分のやりたいパン屋を開店させました。自分の意思をつらぬきとおし、目標を達成できたことが、印象深く何ごともあきらめなければできるということを学ぶことができました。

私はこの本を読み終え、田村さんは環境問題に取り組むだけでなく、人としてもより成長してほしいという思いが感じられました。人に教えるこ

とで自分が損するかもしれないけれど、そうしないと次世代に残すことができません。フランスの人達はそうしてパンを次世代へ残しています。私も自分のことだけではなく、学んだことを人に教えることも大切だということを学べました。そして、誰かに教えることで自分も成長することができると思いました。今後、好ききらいを減らし、私自身も色々な問題に積極的に取り組んでいきたいと思いました。

福也の物語

清湖小学校　六年　喜多　隼大

野球への情熱を持ち続けた選手がいます。名前は山﨑福也選手です。ぼくは、この選手の本を読んでつらいことを乗り越えていく人間の強さに感動しました。ぼくは、ふだん命のことなんか考えたこともありませんでした。でも、この本を読んで生きていることはとても幸せなんだなと思いました。山﨑選手は、脳腫瘍という病気になりました。アメリカの調査では、子どもが脳腫瘍にかかる確率は、人口一〇万人あたり三、四人だそうです。そして、脳腫瘍の種類やできた場所によってさまざまですが、かなりの確率で死んでしまいます。少なくとも、子どもがかかる腫瘍の中では、

脳腫瘍はもっとも死亡率が高い病気です。この病気のことを初めて知りました。脳腫瘍は、とってもおそろしいと思いました。

もし、自分が山崎選手のように脳腫瘍になっていたら、まず死んでしまうかもしれないと思ってしまって立ち直れないかもしれません。でも、山崎選手は、一度はあきらめかけたけど、たちむかいました。

その理由は、日大三高へ行きたかったが脳腫瘍になったので、行けなくなると思っていたけど日大三高の小倉かんとくは、

「待っていますから、安心して、病気を治すことに専念してください。」

と言いました。この言葉は山崎選手を勇気づけるメッセージになりました。この言葉を見てぼくは、言葉だけでも人を元気にすることはできるんだなと思いました。ぼくも山崎選手と同じ野球をやっています。もし、あこがれの高校で野球ができると思ったら、病気を治すための大きな力になると思います。

山崎選手は、病気の時にもう一人出会った人がいます。名前は、長谷部草太朗さんです。草太朗さんは、山崎選手の家の近くにある病院に入院していました。その病気でガンを治すためにたたかっていましたが二カ月後に亡くなりました。ぼくと同じ小学六年生でした。草太朗さんと家族は、とてもつらい思いをしたと思います。でも、何度もピンチを乗りこえてきたので、最後まで全力で生きぬいた姿にぼくは、かっこいいと思いました。山崎選手は、草太朗さんや病気で苦しんでいる子どもの思いを背負ってプレーしています。だからぼくは、自分だけではなく他の人の思いを背負ってプレーをしているから強くなることができるんだと思いました。

いつも、ご飯を食べたり、野球をしたり、学校に行ったりあたりまえものことだと思っていたけど、一つ一つのことがとても幸せだなと感じました。特にぼくが印象に残ったのは『がんばるときはいつも今』という言葉です。なぜ、心に残ったのかというと常にいつも全力で、いっしゅんいっしゅん、がんばるという意味だからです。ぼくは、これから野球を全力でプレーし、野球をやりたいという情熱を持ち続ける選手になりたいと思います。そして、病気の子どもたちに勇気を与えるプレーをしたいです。

人生

内灘中学校　二年　堀井　香那

「恥の多い生涯を送ってきました。」太宰治の小説「人間失格。」その登場人物である大庭葉蔵の第一の手記の出だしである。自分の人生を呪っているかのように聞こえる言葉だ。

私も人前で恥をかき、消えてしまいたいと思ったこともある。しかし、自分の人生を振り返ったときに、ここまではっきりと言い切れることはまずないだろう。

「人間失格」は、人間を恐れ、自分の本心を語

れず、苦しみ、道化によって周囲をあざむきながら生きてきた一人の男が酒や薬物におぼれ、様々な女性と関わりながら、自殺未遂をくり返すという悲惨な物語である。

主人公「大庭葉蔵」は人間の内に真実を求め、裏切られ、挫折し、ついには人間社会、人間という生き物として失格者となる。それは、太宰治の人生でもある。

はしがき。葉蔵の写真が三枚あった。一枚目は十歳前後の写真で作り笑顔の異様な表情のもの。二枚目は高校から大学時代の写真だが、美青年なのに虚無な表情。三枚目は白髪が混じってきた年齢の写真で、やはり無表情で、生きながら死んだ人のようだった。この三枚の写真の説明を読んで、全く理解できなかったし、不気味に思った。自分がこのような不思議な写真を見たとしたら、驚くと思う。

「第一の手記。」「恥の多い生涯を送ってきました。自分には、人間の生活というものが見当つかないのです。」他人の考えている事が理解できない葉蔵は、いつもビクビクして過ごしていたが、やがて自分の身を守るために道化を演じ始める。葉蔵は周りの人を笑わせるが、心の中では泣いていたのかもしれない。そう思うと切なくなった。

だが、他の人に対して演技することは他の人間もしているはずだ。演技している自分に気付かないか、気がついてもそうしなければならない理由で自分を誤魔化したりしているのではないだろう

か。

「第二の手記。」中学生になった葉蔵は演じきっていた道化で、すっかり学校の人気者になってしまった。でも竹一に道化を見破られてしまう。彼の言葉はその後の葉蔵の人生を左右するのだから鋭いと思った。

「お前は、きっと女に惚れられるよ。」

「お前は、偉い絵画きになる。」

竹一の予言ともされる言葉通りに葉蔵は女にモテ、偉い絵画きにならなかったけど、漫画を書いたりする。やがて東京にでた葉蔵は堀木正雄と出会う。彼は葉蔵に、「酒」、「煙草」、「左翼運動」など様々なことを教えた。自分の人生は出会った人によって変わると思った。明るいところにいた方が、心も体も健やかになって気持ち良いはずなのに、どうして葉蔵はこんな暗くてジメジメしたところに居続けようとするのだろうかと不思議に思った。

だが、葉蔵が暗い世界から抜け出せないのは、自分で自分のことを「人間失格」と決めつけているからだと気付いた。自分の居場所はここなのだと決めつけてしまうと、人間はそこから離れなくなるのだ。

私自身、「もうだめだ」「無理」と思い込むとあきらめて、無感情になり動かなくなる。葉蔵は、「自分は人間失格だから暗い方が合っている」と思い深い闇の世界に居るのだと思った。葉蔵の転落人生が始まり、ツネ子との入水自殺をし、結果

ツネ子だけが亡くなり、精神を病んだ。

心中で相手だけを死なせてしまって、自分はその後生きていけるのだろうか。私だったら悲しく、立ち直れなくなり、後悔すると思う。

「第三の手記」が一番読むのが辛かった。葉蔵には同情するが、とても共感できなかった。

女と酒に溺れ、モルヒネ中毒になり、脳病院に入院させられる。廃人同然となった葉蔵は自分を「人間、失格」と確信する。

葉蔵が最後に自分を評価した言葉がある。「人間、失格。もはや、自分は、完全に、人間で無くなりました。」マダムは「神様みたいな子」と葉蔵を評している。自分が思っている自分と他人が思っている自分は違うと感じた。

この小説を読んで思ったことは、人は自分の思い込みから人生を変えていくことだ。自分は人間失格だと思い込むと明るい未来は消えてなくなるのではないかと思う。

彼の人生の意味は何だったのだろうか。この小説を読んで、さらに人生の意味がわからなくなった。

本当の家族

内灘中学校　二年　井下　瑚々

「海を見た日」この作品は、ナヴェイア、ヴィク、クエンティン、マーラの四人のアメリカ・ロサンゼルスの里子のお話だ。この本を読んだきっかけは学校で課題図書となっていたため興味が湧いたからだ。この本は同じ家で暮らしていても、心が通わない養母と里子四人がある日の冒険をきかけに「本当の家族」になっていくという物語である。私は里親制度についてまったく知らなかったがこの作品を読んで初めて知り、自分でも調べて見た。里親制度とは、なんらかの事情により家庭での養育が困難または受けられなくなった子供等に温かい愛情と正しい理解を持った家庭環境の下での養育を提供する制度だというのが分かった。この作品はロサンゼルスの里親制度についてかかれているが、日本ではどうだろうか、と考えてみると当てはまるところもあると思った。日本の場合、里親家庭が少ないため社会的認知度ももちろん低く、児童相談所として信頼できる里親が限られる。だからといって実の親に育ててもらうなかで虐待や暴力を受けている子供もたくさん存在しているのではないか。ナヴェイアのように自分の時間を削ってまで面倒をみなければならない子もいる。クエンティンのように、発達障害を持って生きてる人もいる。このように様々な思いを抱えた子どもたちもたくさんいるんだ、ということに気づき、理解し合っていけるようになりたいと思った。

私がこの本の中で一番大切だと思ったテーマは「家族」や「仲間」の大切さだ。初めは血もつな

がっていないバラバラだった五人がクエンティンのママを探し出す冒険で、たくさんの試練を乗り越えてくうえに一つになっていくという仲間の大切さを教えてくれる、心温まる場面だ。実際に私も「家族」や「仲間」の大切さを感じる時がある。例えばミニバスの試合。私たちは石川県ミニバスケットボール大会で、優勝した経験がある。その時にここまでバスケを続けてくることができたのは一番近くで応援してくれた家族のおかげだと気づいた。また、ここまでこれたのは今まで一緒にプレーしてくれた仲間がいたからこそだったな、と感じた。そこで私は改めて「家族」「仲間」の大切さを感じた。ほかにも今、こうやって当たり前のように生活できているのも家族のおかげだ。自分だけでは生きていけないと改めておもいしった。けれどどうして、ナヴェイアやヴィク達はクエンティンのような血もつながっていない人のためにこんなにも頑張れるのだろうか。そこで私は自分が今まで友達のためにがんばった経験を思い返した。友達のなくしたものを一緒に探す、部活のチームのために試合で走る、などがあった。それはみんな同じ目的・目標に向かって一生懸命になっているからだと思った。きっとナヴェイア達もバラバラだった気持ちがクエンティンのママに会いに行く、という目的に向かって一つになったということが理由であると私は考えた。もし私がこの冒険に参加するとなったら絶対に「会えるわけない」や「きっと無理だ」と最初から諦めてしまうと思う。それなのに絶対に会える、とクエンティンに誓ったヴィクはとても行動力があり、その姿に胸を打たれた。他にも「だれも助けてくれないなら、自分で自分を助けるしかない」というナヴェイアの前向きな姿。そこからナヴェイアの最年長らしさや我慢強さを感じた。この物語は本

当にあった話ではないけれど、たくさんの里子がいることやクエンティンのように親に会いたい時に会えない人もいる、ということは事実である。だからこそ私はまず自分の今の環境にも感謝していきたい。この作品はボランティアとしてロサンゼルスの里親制度を支援している作者だったからこそ書けたのだと思う。今まで、里親家庭を身近に感じてこなかったけれど、より身近に感じられるようになった作品だった。また私はこの本の良さに気がついた。この本はナヴェイア、ヴィク、クエンティンの三人の視点が入れかわりながら話がすすんでいるのだ。それぞれの立場から交互に話がすすんでいくことでたくさんの感情を味わうことができたり、より世界観に引き込まれることができた。

私はこの作品を読むことで里親制度をめぐるアメリカの厳しい実情が分かった気がする。里子の辛さや大変さを今の自分達の環境と比べて考える大切な機会になったと思う。また最終的に「本当の家族」になっていくこの旅を通して「家族」「仲間」の大切さが本当によく分かった。最後に、この物語のあと、ナヴェイア達にはずっと笑顔で笑っていてほしいなと思う。みんなが安心してすごせるような居場所を見つけていきたい、そう思える心温まる作品だった。

毎日、毎分、毎秒

内灘中学校　三年　奥村　稟

私とこの本との出会いは、ある暑い夏の日学生の私たちが大好きな夏休み。私はこの夏オープンしたばかりの「石川県立図書館」へ行った。数えきることができない本の中、パっと目を引いた鮮やかな青色の背表紙に思わず手をのばした。ただなんとなく直感的に読みたいという感情が空から降ってきたようだった。

では、この本のあらすじをざっくり説明しようと思う。主人公の人見知りであがり症の女子高校生の心音が転校した学校である日突然瀬戸くんにバンドのボーカルに誘われる。これを機にバンドを通して、音楽を通してたくさんの仲間に出会う。たくさんの人との出会いや経験が心音を変えてくれるきっかけとなる。そんな青春や音楽の爽やかさを感じさせる物語である。

私が特にいいなと思った場面、心に残った言葉を紹介しようと思う。

一つは、お産の時の大量出血で母が亡くなってしまい、心音と心音の父の二人で暮らしていた日々。その中で初めて心音と父がお互いの心の内を素直に話し涙を流し合ったときの心音の言葉である。

「父はいつも私の計り知れないところで一心に愛情を注いでくれている。私はこの人の娘であることが、この人に育ててもらったことが、一番の財産だと心から思う。」

私はこれを聞いたとき、目から感動が滲み出そうになった。あたかも自分が心音の父であるように感動し、たまらなく嬉しいと感じた。この言葉か

ら心音と父の決してとけない家族の絆を感じ、そんな関係であることはあたりまえではなく、言葉にしきれない幸せであると感じた。なぜなら、私の母は心音の父と重なる部分があると感じたからだ。女手一つ私を育ててくれた母に対しても、この人の娘で幸せだと思うことが多々ある。ほんとうに自分は恵まれているなと心の底から思う。そして、なんの見返りもなく純粋にまっすぐに自分を愛してくれる存在というものはこの世で一番美しく、大切にすべきであると思う。だから、そんな母の存在に感謝しこれからは自分が言葉でも、なにか違うものでも母に還元して、恩を返そうと誓う。

もう一つは、心音の母が生前、歌手として東京でチャレンジしてみないかという熱烈なスカウトを受けたときである。このとき心音の母は自分の歌手になりたいという夢より、自分の家族を優先し音楽の夢を諦めた。ここから私は自分以上に大切だと思える存在がいつか自分にも現れるのかなと思った。命さえおしくはないと言うときがくるのだろうか。

そう考えたとき、今は亡き私の曾祖母のある言葉が浮かんだ。

「この子のためやったらなんでもできて、誰よりも幸せになってほしいと思うものやよ。自分にそんな感情が芽生えるなんて思いもしんかったけど、りんちゃんも大人になったらわかるよ。」

という言葉だ。当時の私はまだ幼い小学生でその言葉の意味を理解することで精一杯だった。しかし当時の私は誰かを愛おしそうに想う曾祖母の温かい目を見て、この言葉が強く自分の心に刻まれた。いつか自分にも命さえおしくないと思える存在ができたとき、もう一段自分がレベルアップできるのかなと思う。

もう一つ、この本を通して気付かされたことがある。それは、人や仲間を信じることの尊さだ。心音は転校前まで誰かに心を広くことができなかった。しかし、バンドのメンバーやたくさんの人に出会い自分自身の成長につなげていた。ここから私は、誰かと出会いワクワクドキドキしたり、悩んだりしたり。そうして仲間と過ごす毎日が宝物のように思えるのは若い今だからできることだと痛感した。いつか、それぞれが別々の道を歩み始めるまでの限られた学生生活をもっとエンジョイしなくちゃと思った。毎日あたりまえに友達と話したり、部活動をしたり、ほんとうに何気ない日々でも、一つ一つが思い出の欠けらであることを忘れないでおこうと強く思う。そんな思い出の欠けらを大切にして、大人になってもみずみずしく思い出せる十代にしたいと思った。

最後に、この本を通して毎日毎日を、毎分毎秒かみしめていきたいという自分の一つの志を得た。毎日のなにげない瞬間こそが私たちの命そのものであると思った。そんな瞬間を愛し、心に宿すことで、なにか嫌なことや落ちこむ出来事があっても、それも人生だと受けとめられる広い器ができるのではないかと思う。さあ、今を大切に。心の思うまま自分の人生の舵を切っていこう。

「一所懸命に生きる」

内灘中学校　三年　武部　日菜子

一所懸命な姿は美しい。

音楽を愛し、仲間を愛し、そして愛された20歳の青年が天国へと旅立った。青年の名は、浅野大義。スポーツ強豪校の市立船橋高校の〝神〟応援曲と言われる「市船ｓｏｕｌ」を作曲した人物だ。幼い頃から音楽が大好きで学生時代はトロンボーンを相棒に音楽漬けの青春を駆けぬけた。素晴らしい恩師と仲間たちに出会い、自分も音楽の先生になりたいと夢に向かって歩き始めた矢先、彼は「癌」という病気にかかる。彼は最後まで希望を捨てずに生ききった。そんな浅野大義の告別式には百六十四人の吹奏楽部員が集まった。彼らから紡ぎ出される音楽は、浅野大義への感謝と願いに溢れるものだった。

私は吹奏楽部に所属している。この本を手に取ったのも、この本が吹奏楽関連の本棚に置かれていたからだ。しかし、私はこの本を読む前まで、この本を読むのは私にとってつらいだろうなと思っていた。先週、吹奏楽の大会があった。私の中学校はその大会で三連覇を果たしていた。吹奏楽は人数が多いほど有利だ。しかし、私達の代は人数が少ない。それでも今年で大会を四連覇できるように、たくさん練習してきた。だが、結果は銀賞で先輩達が繋いでくれた記録を止めてしまった。私は申し訳なくて悲しい気持ちでいっぱいになった。先生、部員のみんな、親、友達みんなが支えてくれたからだ。さらにコロナウイルスに関係して全員出場が叶わなかったということでやりきれない悔しさもあった。私は今まで目指してきた目

標がなくなってしまったことで意欲を無くしかけていた。この本は吹奏楽部員達が努力をして全国金賞に輝くような成功型の話なのではないかと勝手に思っていた。だから、この本を読むと話の中で登場人物達が喜ぶ思いと私の落ちこむ思いの差があって読むことが苦しいのではないかと思い込んでいた。しかし、そんな思いとは裏腹にこの本はやる気を失っていた私の背中を押してくれた。

人はいつ死ぬか分からない。それを気づかせてくれたのがこの本だ。主人公である浅野大義はどんなことも楽しんで取り組み、常に笑顔を絶やさず、部員のみんなから「ムードメーカー」と呼ばれるほど周囲の人々の心を支えていて、毎日を精一杯生きていた。私はそんな彼の生き方を尊敬している。

特に病気が発覚してからの彼の心の強さに感動した。病気になるってすごく不安なことだと思う。ましてや「癌」だなんて死を常に感じてしまうだろう。「最悪、死ってことはないですよね」そう聞かれた時大義は「俺は死なないよ」と答えた。自分に言い聞かせるように。彼は「身体より先に心が死ぬのだろうか。」と考えていた。彼はこのように自分に言い聞かせることで心が死なないようにしていたのではないかと思う。自分の状態を受けとめて自分で自分をコントロールしているのだ。すごいと思う。彼は生きることにとても一所懸命だ。また、彼は病気と闘っている間も音楽を続けている。本当に音楽を愛しているだなと思った。スタジアムで自分の曲である「市船ｓｏｕｌ」を吹きながら大義が「生きている。ここに、このスタンドに俺は生きている。」と言った場面で私は鳥肌がたった。こんなにも生きているということは素晴らしいのか。大義のトロンボーンの力強く柔らかい音が聞こえた気がした。

浅野大義の生き方はとてもまっすぐだ。どんなときも笑顔を絶やさず、何事にも全力な彼だから、告別式には百六十四人も集まったのだろう。そして、そんな強い絆で結ばれた仲間がいたからこそ大義は病気になっても心は健康だったのだろう。類は友を呼ぶというように、素晴らしい人の周りも素晴らしい人なのだ。

私は浅野大義に「精一杯生きればいいじゃん！」と背中を押してもらったような気がする。精一杯生きる。これは案外難しい。つらく、苦しくなったらみんなそこで諦めてしまう。楽だからだ。私はいつもこの段階で止まってしまう。でも、この本を読んで、浅野大義のように生きてみたいと思った。彼の生き方はとても楽しそうできらきらしていた。美しかった。

私はもうすぐ中学生から高校生になる。今仲のいい友達と離れることになるだろうし、受験に受かるかどうかも心配だし、不安でいっぱいだ。でも今から毎日を精一杯生きてみようと思う。勉強も部活も楽しんで全力で取り組んでみよう。続けてみよう。この時間は永遠じゃないから。

令和四年度　内灘町子ども読書感想文コンクール　入賞作品一覧

【小学生の部　優秀賞】

みんなわんだー
清湖小学校　一年　大川（おおかわ）　あん夏（な）

いただきますってなあに
大根布小学校　一年　松井（まつい）　隆真（りゅうしん）

さっちゃんのまほうので
清湖小学校　二年　高島（たかしま）　照（ひなた）

こまっている人いませんか？
大根布小学校　二年　松井（まつい）　梨花（りんか）

「はるかのひまわり」を読んで
向粟崎小学校　三年　津久井（つくい）　美和（みわ）

8月6日のこと
清湖小学校　三年　塗師（ぬし）　暖陽（ひなた）

「木のすきなケイトさん」を読んで
清湖小学校　四年　中山（なかやま）　敬太（けいた）

決してくり返してはいけない
白帆台小学校　四年　夷藤（いとう）　ひまり

捨て犬・未来と子犬のマーチ
この子を引き取ってくれますか？
向粟崎小学校　五年　油野（あぶらの）　琴美（ことみ）

わたしにとっての「時間」
鶴ケ丘小学校　五年　安嶋（やすじま）　凜（りん）

パンづくりから見える環境問題

向粟崎小学校　六年　尾ケ口（おがぐち）　紗弥（さや）

福也の物語

清湖小学校　六年　喜多（きた）　隼大（はやた）

【小学生の部　入選】

ばあばにえがおをとどけてあげる

向粟崎小学校　一年　坂倉（さかくら）　芽生（めい）

わたしのきもち

清湖小学校　一年　橋本（はしもと）　文音（あやね）

テレビのずるやすみをよんで

鶴ケ丘小学校　一年　橋本（はしもと）　文乃（ふみの）

ハリーがゆめみたおんがくたいをよんで

白帆台小学校　一年　八田（はった）　翔汰郎（しょうたろう）

すうがくでせかいをみるの

向粟崎小学校　二年　太田（おおた）　悠真（ゆうま）

「つくしちゃんとおねえちゃん」を読んで

向粟崎小学校　二年　長谷川（はせがわ）　翔一（かける）

「ばぁばにえがおをとどけてあげる」を読んで

大根布小学校　二年　丸一（まるいち）　葵（あおい）

おねぇちゃんって、もうたいへん！をよんで

白帆台小学校　二年　本谷（もとや）　梨衣奈（りいな）

ながーい５ふん　みじかい５ふん

大根布小学校　三年　木村（きむら）　環太（かんた）

「7年目のランドセル」を読んで

鶴ケ丘小学校　三年　越能（こしの）　壮大（そうた）

みんなちがってみんないい

白帆台小学校　三年　前崎（まえざき）　いちか

ぼくの家族

西荒屋小学校　三年　新出（しんで）　彪馬（ひゅうま）

えんぴつびなを読んで

清湖小学校　四年　森（もり）　奏音（みなと）

「みんなのためいき図かん」を読んで

鶴ケ丘小学校　四年　木村（きむら）　宥斗（ひろと）

ぜつめつしそうな動物

大根布小学校　四年　齋藤（さいとう）　希咲（きさき）

「みんなのためいき図鑑」を読んで

西荒屋小学校　四年　堀田（ほりた）　杏（あん）

「リンゴの木を植えて」を読んで

清湖小学校　五年　前（まえ）　来海（くるみ）

「りんごの木を植えて」を読んで

大根布小学校　五年　舩本（ふなもと）　凜（りん）

おとなになれなかった弟たちに・・・

大根布小学校　五年　植原（うえはら）　まは

「十年屋」を読んで

白帆台小学校　五年　高橋（たかはし）　乃愛（のあ）

一歩ふみ出す勇気

鶴ケ丘小学校　六年　角田（かくだ）　佳乃子（かのこ）

今を生きる

大根布小学校　六年

清水（しみず）　蓮斗（れんと）

わたしの生涯

白帆台小学校　六年

池田（いけだ）　優（ゆう）

あした地球が終わるを読んで

西荒屋小学校　六年

前浜（まえはま）　怜菜（れな）

【中学生の部　優秀賞】

「人生」

内灘中学校　二年

堀井（ほりい）　香那（かな）

本当の家族

内灘中学校　二年

井下（いのした）　瑚々（ここ）

毎日、毎分、毎秒

内灘中学校　三年

奥村（おくむら）　稟（りん）

「一所懸命に生きる」

内灘中学校　三年

武部（たけべ）　日菜子（ひなこ）

【中学生の部　入選】

「気持ち次第」

内灘中学校　二年　苅安（かりやす）　渉（あゆむ）

大切にしたいこと

内灘中学校　二年　木場（きば）　乙葉（おとは）

人間は面倒臭いけど、
それが「生きる」を輝かせてくれる

内灘中学校　二年　熊田（くまだ）　茅乃（かやの）

自分を信じること

内灘中学校　二年　髙道（たかみち）　春花（のどか）

「ぼくの弱虫をなおすには」を読んで

内灘中学校　三年　大門（だいもん）　美琴（みこと）

「それぞれの個性」

内灘中学校　三年　根布長（ねぶちょう）　咲希（さき）

「繋がれる命」

内灘中学校　三年　中端（なかばな）　千賀（ちか）

周りと自分

内灘中学校　三年　谷内（やち）　結香（ゆいか）

編集後記

今年度も町内の小中学校から多数の作品を応募していただき「内灘町子ども読書感想文コンクール」を開催することができました。「読書活動」を推進されている先生方、読書ボランティアの方々、保護者の皆様方にご協力いただきまして、ありがとうございました。

この三年間、コロナ禍の不安の中、読書に親しむ機会が減少していたかと思いますが、家庭・小中学校・図書館・地域が一体となり読書活動を推進していくことが重要と考えています。

内灘町では、各小中学校の図書館に司書を配置して児童生徒の読書環境の充実を目指してまいりました。また、それぞれの学校での「朝読書」の取り組み、読書ボランティアの方々の「おはなし会」や「読み聞かせ」の活動も行っています。

今年度も優秀賞の全文を掲載し、作品集を発行いたしました。選考委員である学びの風推進協議会も、子どもたちの感性の豊かさや、純粋な心に感動しております。

子ども達が、たくさんの本と出会い、感動を覚え、読む楽しさや知る喜びを体感できるよう、学びの風推進協議会は、今後も子どもの読書活動を応援・推進してきます。

令和四年十二月

内灘町学びの風推進協議会

会長　中新　由紀子

発行者

内灘町学びの風推進協議会

会　長　中新　由紀子
副会長　荒木　真由美
委　員　橋本　喜美子
高嶋　滋子
浮田　いづみ
竹村　文子
東度　長司
中村　敏男
浅尾　るり子
島　智一

内灘町教育委員会　教育部　文化スポーツ課